

# 脱原発情報

## 東電・三菱重工社員は誰も入りたくないのに… 下請け労働者に任せる こんなことがあっていいのか！

第一原発2号機の核燃料デブリの試験採取が度重なるミスで延期・延期の連続になる中、今度は高い放射線のためかカメラが異常な状態になるなど、またもやミスが続いている。

(資料1)は、わずか3gのデブリ回収に向け と東電に虚偽の報告をしていたと言うのだ！  
高線量のもと、必死で頑張る下請け従事者。

(資料2)はパイプの接続順を誤ったもので長さ1.5m、重さ95kg、直径16cmある。①を最初に接続しなければならないのに⑤に接続してしまっという。

(資料3)は2号機の格納容器内部の状況である。

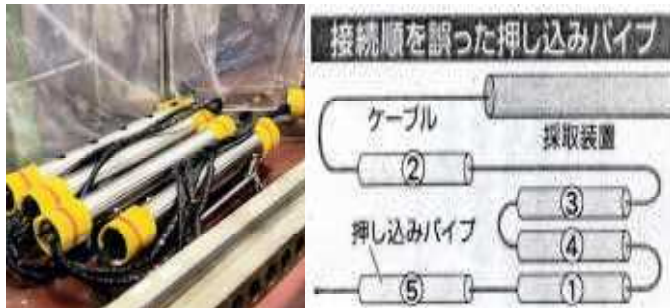
左端が作業員で格納容器内部では、その線量は(推定) 毎時 530シーベルト(Sv)あると言う。この線量であれば毎時 530 Sv × 1000 = 530000 mSvであるから致死量 3000 mSvとして 177人が死亡する線量である。

この作業に従事した従業員は…

- ・ 全面マスクの重装備でパイプが見えにくかった。
- ・ 東電や元受けの三菱重工の社員もいない中での作業でパイプの順番が分からなかった。
- ・ 事前準備は訓練はしていなかった。
- ・ 三菱重工の社員は「28日に準備は終わった」



(資料1) デブリ取り出しにむけ頑張る従事者



(資料2) 左がパイプ 右が誤ったパイプの順序



(資料3) 殺人的線量のデブリと近傍の線量

この事態に東電の小野明・廃炉責任者は「見通しの甘さがあった。今後は安全と着実さを広く考えて行く必要がある」と語っている。

この作業で採取に当たり上限の放射線量を毎時 24 mSvにし、これを超えなければ取り出さないとしている！

これでは最初から無理筋の話である。

そもそもデブリからウランやプルトニウムが核分裂する際に発生する中性子が、高いレベルで検出されている。13年間ジワジワと臨界が発生しているのではないかと想像している。(既報No. 268)

この試みは世界で初めての作業であると言う。

この作業は下請け労働者の犠牲の上にある。

# 廃炉作業がとんでもない事態に…！

今、第一原発では「デブリ取り出しで東電社員が一人もいなかった！」と言われるように、廃炉作業で機能不全に陥っているように思える。下資料でも「事故・故障」の連続である。

①はすでに問題点を発表している ALPS 配管施設が感電事故により救急車で病院に搬送「右前腕設で事故の連続発生である。(既報No. 266・268) と同前腕2度熱傷」の診断を受けた。

②については、現場の状況が反映した手順書が作成されておらず責任者が不明確であると言うのだ！更に、水の漏洩がいか程なのか？放射性物質の量も開示されないままである。

③は(資料4～5)の5階建ての「放射性貯留ピット」(木材チップが大量に発生)と、そこに水蒸気が発生し高温になったため火災報知器が作動し消防署へ通報が行われた。

大量の放射性廃棄物、木材チップ約 800 m<sup>3</sup>、溶液約 600 m<sup>3</sup> がピット内に発生した。この問題は双葉地方消防本部浪江署から文書指導を受け 2011 年には柏崎刈羽原発でもチップ置き場から火災が発生していた。この状況を注意すべき責任者がいないことが、この事態をもたらしたのだ。

④については最も重要問題である。

この事故は(資料6)の赤い部分のケーブルを避けてコンクリートを砕く予定だった言う。ところがケ

ーブルを破損させてしまった。そのため従事者

## 第一原発の今年に入ってからトラブルの連続発生

- ①増設 ALPS(B系)配管洗浄作業における身体汚染事故(2月発生)
- ②高温焼却炉建屋からの放射性物質を含む水の漏洩事故(5月発生)
- ③増設雑个体焼却施設廃棄物貯留ピットから水蒸気等の発生による火災報知器発生(6月発生)
- ④電源 A系停止と負傷者発生状況事故(6月発生)

もしかしたら大変な事態になった可能性があった。更に 10 時から 16 時まで約 8 時間、所内電源が停止し、放出中の ALPS

処理水の放出が停止する事態になった。

規制庁ではこの事態をどう見ているかである。その結果は…

①リスク管理の不備：高放射線量、漏洩、感電のリスクの抽出が適切に実施とされていない。

②現場の確認が出来ていない：確認の未実施、直前の未実施、思い込みにより現場では対応が出来ていない。

③手順書の不履行：未実施、未整備、作業体制など不履行がある。

④責任分担の未実施：不明確な作業依頼、高レベル放射線物質の明確化がなされていない。以上が東電が抱えている病巣の現状である。

「ふくしま原発作業員日誌・イチエフの真実9年間の記録」(注1)では「東電社員が次々と辞めてい

く！」と記している。とんでもない事態である。



(資料4) 木材チップが 800 m<sup>3</sup>・溶液 600 m<sup>3</sup>とは



(資料5) 5階建チップ



(資料6) まかり間違えばとんでもない事態に…



# 過小評価の真実に迫る！！

千葉 親子

高エネルギー加速器研究機構黒川眞一名誉教授は「当時福島市は低温で湿度が高く、高濃度の放射性物質の影響でイオン化し、濃霧状の『霧箱』のような状態に陥っていた可能性がある」と指摘。

9月11日、第11回「311子ども甲状腺がん裁判」の口頭弁論が東京地裁、103号法廷で開かれた。今回も多くの支援者が85席の一般傍聴席を求めて207人が東京地裁前に並んだ。

14時開廷の103号法廷は、傍聴者を廊下に待たせ約15分遅れて開廷された。時間配分と原告本人の意見陳述が開廷間際まで議論になっていたのだ。裁判所から、今回の期日までに原告の主張をすべて出し切る様にと求められていた。

原告側から言うべきことは言い尽くすと準備書面15本が提出された。一つの裁判期日に15本の書面の提出は、今まで聞いたことはないという。一方被告東電側は2本の反論書面を提出した。井戸弁護団長の報告を要約すれば、一つに「日本では、福島

の健康被害は無かったという神話が蔓延している、病理に触れないで、個々の病状に触れずに、数だけをあげて議論を終えようとしている」二つ目に「甲状腺がんは過剰診断だ、スクリーニングすればそのくらい見つかる。」としてその根拠となるものは、UNSCEAR報告書である。それを今回2つの面で反論内容の準備書面を提出した。蔓延している神話を打ち破っていく、原告の皆さんを救済する道だし、背後にいる300以上

や、400人を超えているだろうと思われる子どもさんを救済する道である。甲状腺だけではない、その被害はもっと広範囲にあるはずだ。



(資料7) 東京地裁前に200人以上が傍聴券を求め並んだ

その神話を打ち破らなくてはならない大きな武器を今回準備書面で提示できた、と報告された。黒川眞一名誉教授は「間違ったデータやグラフが複数ある」「論文引用の誤りで科学的な基礎知識に欠ける」と、UNSCEAR報告書の

データラメ報告書の撤回を求めてきた科学者だ。今回の黒川意見書がUNSCEARを追い詰める手ごた



(資料8) 霧箱について説明する黒川眞一先生

えと扉をこじ開ける事となった。黒川眞一氏はUNSCEARという巨大組織に1人で立ち向かってそのインチキさを暴いている。意見書で、報告書はデータ解析の際SPM(浮遊粒子状物質)局で採取された大気汚染を監視するために設置されているセシウムの値が大幅に少なくなっている事を指摘。

「最も高濃度の放射性プルームが福島県内を覆っていた3月15日から16日にかけて、福島市内では気温が低く、かつ湿度の高い飽和状態に近い気象条件にあり『霧箱』のような状態に陥っていた可能性がある」と指摘した。いま「311子ども甲状腺がん裁判」は、科学的にも人道的にも、原発事故被害の実態が明らかになる重要な裁判を闘っている。(次回、第12回口頭弁論の予定は12月11日(水)14:00～ 東京地裁103号法廷)

## デブリは放射性物質の総量に入っているのか？

今月 18 日、いわき市において再開後 80 回の東電交渉が行われた。2 時間の交渉時間であったので割愛して伝えたい。

### 質問の内容は…

- 1、2 月 7 日の第二セシウム吸着装置サリーでの汚染水漏洩事故に関連しての質問への回答。
  - 2、放出する全放射性核種の濃度、総量などの全情報を公開し、海底土や海浜砂、生物への吸着・濃縮による放射能の蓄積とフィードバックを再評価すること。
  - 3、地下水の止水、トリチウム分離技術の実用化、大型タンク保管案やモルタル固化保管案等の検討、スラリー安定化処理設備の設置など汚染水についての抜本対策を確立する事。
  - 4、2022 年 5 月 12 日付「理解と合意なき汚染水海洋放出設備工事の 6 月着工の中止などを求める要請書」への東京電力の回答など、これまで質問事項への未回答への回答。
  - 5、2022 年 11 月 16 日付「福島第一原発 1 号炉の原子炉圧力容器を支えるペDESTAL の損傷に関する早期の詳細調査と緊急安全対策を求める要請書」への再回答と質疑。
- 以上

### 1. について

(東電)～一括での水抜きは実施していない。重要度によって行っている。処理汚染水放出前と放出後では 10 人を増員している。

### 2. について

(諸団体)～前は「東電として現時点で 1400 億円の費用支出があることは承知していないし、答える立場ではない。関与しないし、国に聞いてほしい」と言う言い草だったが！

(東電)～風評被害を最大限抑制するため関係者の皆様のご懸念や関心事項に向き合いながら対話により必要な対策したい。大変申し訳ないが風評対策の予算や費用については回答を控えさせていただきます。

(諸団体)～自社が起こした事故で、「政府予算だから知らない」と言い草はひどい！そうやって生きながらえている企業という自覚がない。

### 3. について

(諸団体)～2027 年 3 月、安定化処理設備の運転開始までの工程は？

(東電)～2026 年末にできるようにしている。

(諸団体)～「スラリー安定化処理設備」は汚染水問題や今後の第一原発のあり方を決定付ける役割を持っている。規制庁は「この問題はノーカイエスかではなく、カウンタープロポーサル(代替え案)をだせ！」と言っている。それが出せるような様子で

はないと判断しているがどうか？

(東電)～やるようにしている！

### 4. について

(諸団体)～スラリーの中身は豆粒一つ位が 100 万 Bq や 4000 万 Bq という凄い線量である。大変な代物である。

(東電)～ALPS 設備内部で炭酸塩スラリーや鉄共沈スラリーが発生している。

(諸団体)～性状は何か？

(東電)～ストロンチウム 90 である。

(諸団体)～ストロンチウム 90 は「親骨性」で危険な代物だ。それが大部分だと言う。福島県はとんでもない代物が積みあがっている。改めて聞くがデブリ 880 トンは第一原発のインベントリ(放射性物質の総量)の中に入っていないのではないか？

(東電)～その中に入っている。

(諸団体)～大変なことだ、次回に回答してほしい！「デブリを取り出せる」と言うは幻想に過ぎないのではないか？

### 5. について

(割愛)

### ・デブリ取り出しの現況について

(東電)～「2 号機燃料デブリの試験的取り出し中断に関する原因と対策」を長々と説明した。

以上

次回交渉は 11 月 14 日(木)の予定です。

## 東芝の崩壊と経営の無能と劣化する現場 ⑥三浦眞吾

産業省の官僚は東芝を原発事業に引きずり込む一方で日米半導体協定を結び、世界最強のメモリ事業を弱体化させてしまった。国や電力業界の保護の下に競争が無くなり企業風土を変質させる一方で、メモリ事業の縮小で体力低下が起きてしまった。弱った体力に精神的たるみは癌のように組織全体に急速に広がってしまったように見える。最近のデブリ取り出しに失敗続きで、現場には東京電力社員がただ一人もいなかった。この病根は同じで、これほど危険なものはない。関わった者は全て崩壊の運命にある。これは現在の日本の病弊と関連するものと言わねばならない！

東芝の崩壊は原発という国家の厚い庇護の下にある危険な事業に社運を賭けたことにあった。

事業そのものの危険性、原発特有の被ばく下請け労働構造など上層部に上がらない構造となっていたと思われ、その危険な事業に対する鈍感さに繋がって行った。

GE社と共に東芝は福島原発の整備を行い3号機は東芝の全面整備で実施して来た。全くの未経験からの整備の困難で初期不良・障害等で現場技術の苦労は大変だったと聞く。危険なシーンは枚挙に暇がなかったはずであり、危機管理、将来の事業展開には重要であったが、経営に危機管理の跡はまったくうかがえない！

福島原発を当初から実務に関わって来た東芝元佐々木則夫社長は原発事故の危機的状況でのエピソードがある。菅直人首相は「原発事故の初動がスムーズにいかないことに苛立っていた！」特に、原子力安全・保安院などの専門家は官邸に来ないばかりか不信感を持ったのだ！同社長が官邸に呼ばれ「この後、どうなるのか？」との問いかけに「爆発します！」と即答したとされている。

これほど原発の実務に詳しい人物が、経営者となると危機管理も全く出来なかった。

以前にも紹介したが、WH社買収は日本メーカー同士、三菱重工との泥試合であったが、西室が買収を主張したため、西田社長が追随し4次入札までに到り6600億円の高掴みとなった。同社長が、これを停めた形跡はなく、その罪は殊更に重い。東芝歴代経営トップの罪はでやるべきことをやらず、やってはいけないことだけをやってしまった感があった。ずさんな調査でWH社買収に突き進んだことや、やるべきこと！半導体関連の

先進的事业は世界に誇る技術があった。

この失敗を防ぎ、原発に頼らずとも済むように育てることだったが、それほど努力がされたようには思えない。東芝メモリは1980年代、画期的なデータの保存方法でNANDNフラッシュメモリを開発し、世界のメモリ市場を席捲していた！

電源を切ってもメモリデータは消えない。この技術は今でも有効であり、本来であれば、あの勢いが継続していた筈だった。

ところが米国の支援を受けていたサムソン電子に1992年技術供与をしてしまった。当時、強くなり過ぎた日本を警戒し、韓国や台湾を育てるアメリカの戦略に乗り、日米半導体協定を結んでしまった結果が、今日の半導体の日本一人負けの状況である。

これに懲りず、台湾TSMCの世界最大の専業半導体工場の熊本誘致である。官僚の言うことを聞いていたら企業は世界で負け続けてしまうのは必然である。

日本の官僚組織の問題は東大卒多数ではなく、専門性が軽視される実態にあり、専門職の技官は軽視され、事務職が本質を理解しないままで運営していることで、この官僚改革は避けては通れない喫緊きつじんの課題である。

また、政治家の官僚のコントロールの問題がある。岸田後を狙う河野太郎氏や小泉進次郎氏も同様で、選挙目当てに原発問題を棚上げする等、残念なことである。これでは官僚の差配など出来ようはずがない。

官僚組織を専門性の高い組織に作り替え、日本に課された課題の本質を見抜き将来を見据えた政策提言が出来る体制をつくりたいものだ。



# 被ばくはいつも歪められてきた

広島・長崎～第五福竜丸～調査船 拓洋・さつま～福島

斉藤章一

8月4～6日、被爆79周年原水爆禁止世界大会・広島大会に参加してきた。米軍は詳細な被ばく調査を行いながら甚大な被害を世界から隠蔽した。ここから核を巡るおぞましい深い闇が始まった。

広島では約14万人、長崎では約7万人が亡くなったとされているが正確な原爆犠牲者数は現在でもわかっていない。政府が調査を怠り、また朝鮮や中国人、捕虜米兵など多くの外国籍の人も、多額の補償を恐れた政府が調査をしなかった。また、政府が線引きした外の被爆を認めず今日まで裁判が続く。

この政府の姿勢は1954年のビキニ環礁における第五福竜丸の被ばく事件や「NHKスペシャル封じられた」第四の被曝(ひばく)「なぜ夫は死んだのか」で放送された海

上保安庁の調査船「拓洋」と「さつま」の乗員の被ばく(1958年)の対応につながる。この事故で夫を急性白血病でなくした妻の永野澄子さんは政府の役人から「秘密、秘密、秘密、米国との関わりがあるから」と事件の実態すら知らされなかったと言う。

(資料9) 番組では米国の機密解除された書類から、抽出検査した乗組員24名中16名から「500mSv以上の被ばくに現れる白血球減少や脱毛、体調不良など」を米軍医師が報告していた。それにも関わらず日本政府は根拠も示さず「被ばく線量はわずかで、永野さんと白血病の関連は考えられない」と公式発表したのだ。結果、何の補償もされなかったという。政府は被ばくを20mSv程度と推定した。米国資料は被爆者の症状から「500mSv以上の被ばく」を推定しているのに。

そして福島第一原発事故である。ここでもこの

流れは遺憾なく発揮された。福島県放射線健康リスク管理アドバイザーとなった山下俊一長崎大学教授は「100mSvは大丈夫。毎時10μSv以下なら外で遊んでも大丈夫」、「放射線の影響は、実はニコニコ笑ってる人には来ません。クヨクヨして

る人に来ます」などと国が定めている「年間1mSvという法律を無視した指導を行い被災者・子どもたちに余分な被ばくをさせた。後に「ミスター100mSv」と批判されると「私の仕事は被災者を安心させることだった」と豪語した。科学者の良識は地に落ちた。

No.	白血球の数	好中球	リンパ球
1 操舵長	重症の減少	20%	< 74%
2 次席機関士	減少	44%	< 46%
3 観測員	減少	32%	< 60%
4 観測員	重症の減少	26%	< 70%
5 観測員	普通	62%	32%
6 主計士	減少	42%	< 52%
7 看護長	やや少ない	48%	< 50%
8 船医	やや減少	49%	43%
9 航海長	普通	68%	29%
10 甲板次長	普通	68%	32%
11 甲板員	やや減少	48%	46%
12 衣糧員	やや減少	42%	< 52%
13 船医	減少	50%	42%
14 看護長	やや減少	30%	< 54%
15 観測員	普通	40%	22%
16 操機員	普通	62%	28%
17 甲板員	普通	66%	26%
18 甲板員	減少	47%	43%
19 次席機関士	減少	40%	< 54%
20 観測員	やや減少	50%	36%
21 観測員	普通	55%	24%
22 観測員	重症の減少	30%	< 66%
23 衣糧員	減少	42%	< 52%
24 操舵員	重症の減少	42%	< 46%

好中球・リンパ球割合が逆転  
12人/24人

(資料9) 24名の血液検査で16名から被ばくの急性症状、白血球の減少が!

また、福島県の「県民健康調査委員会」は2021年5月に300ページを超える報告書を公表したが被ばくの基本調査についてわずか1ページ半、外部被ばくのみを集計で、2mSv未満が全体の93.8%、最大値25mSv等と書いた。避難所のスクリーニング検査では「1歳児甲状腺被曝量100mSv以上が推定される13000cpm<sup>注2</sup>以上」の被災者が901名、その10倍に当たる10万cpmが102名という記録が残っている。しかも当時規定値オーバーの大多数のため途中から10万cpm未満の人は記録さえ残されなかったのだ。広島・長崎の闇が現在も深まっている。

### 出典 文献

・(資料1～6) 東京電力HD ・(資料7) 編集部・(資料8) 311甲状腺がん裁判支援ネット・(資料9) NHKスペシャル封じられた第四の被曝 (注1) 「ふくしま原発作業員日誌・イチエフの真実9年間の記録」片山夏子氏・東京新聞記者 (注2) 1分間にサーベイメータが受ける放射線の数